慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小田英郎助教授学位論文審査報告
Sub Title	Summary of the doctorate thesis
Author	
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1971
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.44, No.11 (1971. 11) ,p.134- 139
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19711115-0134

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小田英郎助教授学位論文審査報告

小田英郎君提出に係る学位請求論文「現代アフリカの政治とイデオロギー」の内容は次の通りである。

序　章　現代アフリカの政治とイデオロギー
1　変動期の政治におけるイデオロギーの比重と役割
2　アフリカ的イデオロギーの特殊性

第一章　ナショナリズム
1　アフリカ・ナショナリズムの性格
2　アフリカ・ナショナリズムにおける主体性の論理と心理
3　アフリカ・ナショナリズムの系譜

第二章　パン・アフリカニズムのイデオロギー的形成と発展
1　パン・アフリカニズムの概念
2　主体性のイデオロギーとしてのパン・アフリカニズム
3　アフリカ・ナショナリズムとの接合と発展

第三章　前期パン・アフリカニズムの史的展開
1　パン・アフリカニズムの主流とデュボイ
2　一九〇〇年パン・アフリカ会議とデュボイ
3　谷間の時期のパン・アフリカニズム
4　一九一九年パン・アフリカ会議とデュボイ
5　頂点にたつ前期パン・アフリカニズム
6　下降する前期パン・アフリカニズム

第四章　マーカス・ガーヴィーと前期パン・アフリカニズム
1　問題点の検討
2　ガーヴィーの人種観とアフリカ観
3　ガーヴィー主義運動の展開
4　結語――ガーヴィーとパン・アフリカニズム

第五章　アフリカ社会主義のイデオロギー
1　アフリカ社会主義の現代的意義
2　アフリカ社会主義思想の諸潮流
3　アフリカ社会主義思想の問題点

第六章　人種差別のイデオロギーと制度
1　問題視角の設定
2　アパルトヘイトの実態とその論理
3　アパルトヘイトの矛盾
4　アフリカーナー・ナショナリズムのゆがみ

第七章　政治と軍部
1　視点の設定
2　アフリカにおける軍隊（国軍）の創設と発展
3　将校団の形成と軍部の政治的抬頭
4　軍・民関係
5　将来の測定

現代アフリカに関するわが国の研究は、その黎明期にあるといつて差支えない。これまで発表された研究業績は決して数多いとはいえないし、そのなかで代表的な業績といわれているものについても、そのほとんどすべては制度的研究もしくは欧米諸国の研究成果の紹介であつた。本論文は、このようなわが国における従来の研究業績とは異り、文明変動論的および社会変動論的視点を導入することによつて、変動期にあるアフリカの動向に重大な影響をあたえる現代アフリカのイデオロギー的状況を理論的に分析・整理し、そのうえにたつて、アフリカ的諸イデオロギーとイデオロギー運動の実体との相互関係、ならびに若干の問題についてイデオロギーと現代アフリカ政治との関係を動態的に把握しようとしたものである。その意味において本論文は、わが国の現代アフリカ研究においてユニークな地位をしめる本格的な研究業績であるといつて差支えないであろう。ことに未開拓なこの分野の研究に対する著者の研究態度と緻密なその手法は高く評価されてよいと思われる。

著者はまず序章において社会変動とイデオロギーとの関係について考察し、「変動期の政治においてイデオロギーがいかに大きな比重を占め、いかに巨大な役割をはたすか」を理論的に究明したのち、第二次大戦後独立を獲得し、近代化ないしは国家発展への途を歩むアフリカ諸国が、その激しい変動期において、政治発展を経済発展に先行させなければならない根拠を明確に示すとともに、その政治発展が多くの点で至福千年的ユートピア的未来像によつて支えられていること及びこのような政治的要請を正当化し説得力をあたえているものこそまさにイデオロギーであることを明らかにしている。ついで著者は、現代アフリカの政治において、このように重要な役割を果しているアフリカの支配的なイデオロギーの特殊性を「伝統的価値志向性」と「イデオロギー的脱植民地化への志向性」の二つに求め、その相互関連性を論究し、それが、伝統的な文化、価値に根ざした新しいアフリカの主体性を主張することによつて、過去と未来とのあいだに有機的な関連をつくり出し、過去への愛着を未来へのエネルギーへ転化させようとする性格をもつていることを明らかにしている。

このような立場にたつて、第一章では現代アフリカの諸イデオロギーの基本的内容の一つをなすナショナリズムの問題が、とりあげられている。著者はまず、ナショナリズムおよびネーションに関する主観説、客観説、折衷説などを検討し、アフリカ・ナショナリズムの契機を帰属意識などの主観的心理的要素にもとめ、アフリカには客観的な要素を基礎として歴史的に形成されたネーションがはつきりしたかたちで存在しないため、ヨーロッパ的ネーション形成の過程とは逆に、一般に国際的権利集団から文化集団としてのネーションへという形をとらざるをえないとし、その当然の結果として、現代アフリカには、独立した国家をそのままネーションとして発展させようとするミクロ・ナショナリズムと、ネーションなきナショナリズムという特殊性からくる超国家的ネーションの創造を志向するマクロ・ナショナリズムとが交錯していること、ならびにアフリカ・ナショナリズムは、植民地時代に存在した劣等性と無能力をし

めすアフリカという言葉のもつマイナス・シンボルをプラス・シンボルに転換するため、アフリカ一体性の意識がつよく、したがつてマクロ・ナショナリズム、パン・アフリカニズム的性格を依然として根強くもつていることを明らかにしている。著者はこのようなアフリカ・ナショナリズムは、「アフリカ大陸と新世界という二つの地域を基盤として複線的に発展し、一九四五年の第五回パン・アフリカ会議を契機として単線化された」ものであるとして、従来広く行われている通説、(1)「アフリカ大陸内のイデオロギー・運動」とみる立場　(2)「新世界黒人運動の外延」とみる立場、のいずれに対しても鋭い批判をなげかけている。本章において著者がおこなつているアフリカ概念を媒体としたアフリカ・ナショナリズムの論理と心理の分析と、アフリカ・ナショナリズムの系譜についてのその新しい解釈とは立論の妥当性からみて著者のこの問題に対する価値ある貢献といつてよいであろう。

第三章は、現代アフリカの顕著な特徴をなすアフリカの主体性確立への要求に大きな影響をあたえたパン・アフリカニズムがいかなるかたちで明確なイデオロギー運動として形成されていつたかを論じている。著者によれば、パン・アフリカニズムは、一九四五年の第五回パン・アフリカ会議を境にして前期パン・アフリカニズムと後期パン・アフリカニズムとに分れ、前者は、結局アフリカ系知識人を中心とする西欧世界での人種的不平等への抗議運動の枠をこえることはできなかつたが、この運動はその反面、アフリカ史、アフリカ文化の再認識、再主張を通じてアフリカ概念の形成にかなりの役割をはたしたと評価されている。これに対して後期パン・アフリカニズムにあつては、その担い手がアフリカ系知識人から土着のアフリカ・ナショナリストにかわり、それとともにパン・アフリカニズムは狭義の土着的アフリカ・ナショナリズムと接合し、相互補完的関係にたつて明確な反帝反植民地主義的イデオロギー、アフリカ主体性的イデオロギーへと発展していつた。しかし、パン・アフリカニズムにみられる「アフリカの統一」への主張は、一九六〇年代に入つて個々のアフリカ国家がネーションとしての実体を整えはじめるにつれて、アフリカの政治的統一ではなく、アフリカ独立諸国間の「希求と行動の整合・統一」という機能的なものに変化してきており、この傾向は今後強化されるであろうと著者は主張している。パン・アフリカニズムが現代アフリカの方向を規定する重要なイデオロギーと運動であることはいうまでもない。それにもかかわらず、この問題に関する本格的な研究はわが国では極めて数少ない。その意味で、パン・アフリカニズムを「アフリカの主体性のイデオロギー」として理解しつつ、その形成と発展過程を理論的に解明しているこの部分は、従来の研究に対して新しい視点を提供したものといつてよいであろう。

著者はついで第三章で、前章のパン・アフリカニズムの理論的全体的分析をふまえて、前期パン・アフリカニズムの史的発展を、「パン・アフリカニズムの父」といわれるW・E・デュボイとの関係において分析している。ここでは、アフリカ合衆国・西インド諸島のアフリカ系知識人によるパン・アフリカニズムの展開を、四回

にわたるパン・アフリカ会議とそれに対する西欧植民地諸国の反応との関係において究明し、そのなかでデュボイが理論家として、また実践家として果した役割を詳細に検討している。本章のもつ特徴は、これまで主としてアメリカ黒人運動史研究の対象となつていたデュボイを、パン・アフリカニズムのイデオロギー及び運動形成の面から再評価したところにあり、その意味で、第四章の「マーカス・ガーヴィーと前期パン・アフリカニズム」とともに、新しい分野をひらいた研究として評価されてよいであろう。

第四章で扱われているマーカス・ガーヴィーは、アメリカ黒人運動史のなかで、極めて特異な存在である。かれは一般に、黒人の一体性の立場から人種的混淆を拒否した点で「人種的ショーヴィニスト」と評価され、「アフリカへの帰還運動」を主張し組織した点で「分離主義者」であると批判され、「愚かな夢想家」として嘲笑されてきた。しかし、このような評価に対して、著者は新しくガーヴィーをパン・アフリカニズムの歴史のなかで再評価し、かれが「アフリカ人のアフリカ」をスローガンとして強烈なアフリカニズムを顕現させ、黒人大衆にアフリカ系人としての自覚をうえつけ、さらに「アフリカ共和国」の樹立を宣言することによつて政治主義を前面に押出し、アフリカ帰還運動によつて合衆国の黒人をアフリカと直接に結びつけようとした点で、この運動の主流であるデュボイよりも、より強烈なパン・アフリカニズムへの貢献を果した、としている。このようなガーヴィーに対するパン・アフリカニズムの視点からの再評価は、従来の西欧及び日本アフリカ学界の解釈に対して新生面を開いたものであり、エンクルマ前ガーナ大統領らアフリカ・ナショナリストのガーヴィー評価にも通じるものをもつていることから考えても、本論文のもつとも注目をひく部分であるといつてよいであろう。

著者は、以上のようにアフリカ・ナショナリズムとパン・アフリカニズムの問題をとりあげたのち、現代アフリカのイデオロギーのいま一つの主要な要素をアフリカ社会主義にもとめ、その問題を論究している。著者は、アフリカ社会主義が未熟であり、体系化のレベルは低いことを認めながらも、「ごく初期的な経済開発の至上命令、イデオロギー的脱植民地化の要求、近代性と伝統の融合といつたさまざまな要求」をみたしながら国家建設のイデオロギーとして自己形成されつつあると主張し、これを「アフリカ的マルクス主義」（ギニアのセク・トゥーレ、ガーナのエンクルマ等の思想）、「社会主義的人道主義」（セネガルのサンゴールの思想）、「福祉国家型社会主義」（タンザニアのニエレレの思想）の三潮流に区分し、それぞれのもつ特徴をかなり詳細に説明している。著者はさらに、アフリカ社会主義の根底にながれるアフリカ共同体的伝統いいかえれば労働の社会的義務感、生産主義的観念、無階級社会的志向、社会一元論などの諸要素が不完全ながらアフリカ社会主義を「開発のイデオロギー」として効果的なものにしつつある現在の状況を認めながらも、工業化の進行とともにそれが開発のための効果的要因として恒久的に作用しつづけるか否かについて強い疑問を提出している。

第六章は現代アフリカに存在する特殊なイデオロギーとして、人

種差別の問題をとりあげ、南ア共和国におけるアパルトヘイトの思想と制度について分析している。著者は、アパルトヘイトを単なる道徳上の問題としてではなく、南アの特殊な歴史的人種的条件から生みだされた特殊な現象であるとし、これをアフリカーナー（オランダ系白人）・ナショナリズムとの関連において具体的事実をあげて詳細に究明するとともに、グレイトトレック、ボーア戦争、ブアー・ホワイト化といった歴史的経験からくる不満、不安、挫折感が心理的遺産としてアフリカーナー・ナショナリズムのなかで定着し、それが経済力をもつ英系白人の上からの圧力と、多数者であるアフリカ人の下からの圧力に挟撃される脅威をアフリカーナーに感じさせたことによつて、アフリカーナー・ナショナリズムを極端な人種差別イデオロギー及び運動として顕在化させたこと、しかしそのような根源をもつアパルトヘイトそのものが南アの経済発展にとつて極めて大きな阻害要因をなし、そこに大きな将来への矛盾が存在することを指摘している。アパルトヘイトの問題はわが国では比較的数多く論じられていることは確かであるが、その大部分は道徳論、制度論の立場からであり、本章のようにアフリカーナー・ナショナリズムとの関連において歴史的思想的心理的根源にまでふみこんだ研究は稀有であるといつてよい。

第七章「政治と軍部」はこれまで現代アフリカのイデオロギーの問題をとりあつかつてきた部分とくらべて、やや異質的なものである。ここでは、アフリカの近代化過程における軍部の政治的役割が論じられているが、本論文が「現代アフリカの政治とイデオロギー」とされているのは、主としてこの一章が存在するためであろう。現代アフリカの政治はとりあげれば極めて広汎にわたる問題を含んでおり、その意味では、この一章が重要な問題をとらえているにしても、現代アフリカの政治を論ずるには全体的に十分とはいえないであろう。しかし、本章で著者が、最近アフリカにみられる軍部の政治的抬頭を、西欧あるいは先進国的価値観から一方的に悪と断定すべきではなく、現在のアフリカのもつ特殊条件から客観的に理解する必要があること、現代アフリカでは他の政治集団・社会集団が脆弱なため軍部がもつとも凝集性のたかい知識人の政治集団として近代化推進の役割を担いうるものであること、を指摘していることは注目すべきであろう。さらに著者は、アフリカ諸国の軍民関係を、軍部優位型（長期的軍部支配型と短期的軍部支配型）、文民優位型、伝統主義的・個人的権威主義型の三類型に分類し、その将来を予測して、軍部のもつ能力限界を含む諸種の条件から短期的軍部支配型が増大するであろうことを予測している。とくに軍民関係の分析とその予測には著者の独自の見解が表明されており、注目されるべきところであろう。

以上に明らかなように、本論文は、随処にこれまでわが国のアフリカ研究では十分に解明されなかつた分野での新しい研究成果がみられるばかりでなく、これまでの通説に対してもそれを批判し、十分な論拠をもつて著者独自の新しい解釈を提供している。その意味で、わが国の現代アフリカ研究に対する著者の貢献は極めて大きいと確信する。もつとも、なお将来にわたつて著者の研鑽を期待しな

ければならない問題も存在する。たとえば、パン・アフリカニズムとアフリカ・ナショナリズムとの関係とくにアフリカ・ナショナリズムの個々の指導者がパン・アフリカニズムの影響をうけついでいく具体的思想的過程、アフリカ社会主義がイデオロギーとしてばかりでなく、アフリカ諸国において具体的にどのように実践され、どのような問題に当面しつつあるかの問題、現代アフリカの政治経済の実態とイデオロギーとの相関関係の究明などはその例であり著者の今後の努力を俟つこととしたい。しかし、このことが、本論文のもつ秀ぐれた価値を基本的に損うものでないことはいうまでもない。

以上、本論文を通じてみられる小田英郎氏の学殖は、法学博士の学位を授与するに十分なものと認められる。

昭和四十六年九月十日

主査　慶應義塾大学教授　法学博士　石川　忠雄
副査　慶應義塾大学教授　法学博士　内山　正熊
副査　慶應義塾大学教授　法学博士　神谷　不二

備考　本学位は慶應義塾大学学位規定第四条によるものである。